

伝統の松本押絵雛 夫婦二人三脚で伝える

松本地域には数々の伝統的な工芸品があります。

そのひとつ「松本押絵雛」は、一度は途絶えた制作技法を努力により復活させたもの。

豊かな表情と柔らかなシルエツトが特徴的な松本押絵雛を、全国で唯一制作・販売する、ベラミ人形店の三村隆彦さん・修子さん夫妻に、その歴史や制作の話、伝統工芸品としての松本押絵雛への思いをうかがってきました。



三村修子さん

三村隆彦さん



七夕の時期に飾られる紙雛



古い押絵雛(右)を復元(左)した



お雛様とお内裏様。制作に数年かかる



パーツそれぞれをひとつに。右が復元したもの



型からそれぞれのパーツを作りあげる



隆彦さんは均等に綿を入れ糊付け



修子さんは人形の表情を丁寧に描いていく



二人で分担し一つの制作物を作る

武家の子女のたしなみから商売へ 松本押絵雛の興隆と衰退

松本押絵雛は、武家の子女のたしなみとして江戸時代から松本地域で作られていた、布や綿を使ったぶつくりとした立体感のある押絵の人形です。ここでいう雛は「雛型」小さく作ったものを意味し、代表的な三月の節句のおひなさまのほか、五月の節句の武者人形、歴史上の人物、昔話、縁起物などさまざまな題材のものを総称して「松本押絵雛」と呼びます。

題材の豊かさが特徴の一つで、面長の浮世絵風の顔は正面を向いているものは少なく、顔を見合っているものもあります。柔らかなシルエツトも相まって、いまにも会話し動き出しそうな、その物語性にも注目です。その後商業ベースにのり全国へと広まりましたが、昭和のはじめころにはその作り手が途絶えてしまったのです。その原因は定かではありませんが、松本の大火や鉄道の発達による立体型のおひなさまの流通などがあげられています。

「地域の伝統を残したい」 伝統の技法の復活

このいったん途絶えてしまった松本押絵雛ですが、ベラミ人形店の先代・三村隆重さんが、東京の羽子板職人のもとで修行して身に付けた押絵の技術を生かし、復活に取り組みしました。そこには、古い押絵雛の修復を依頼したい人や押絵雛の復活を望んだ人など、地域の人々の後押しもありました。「地域に伝わってきた伝統を改め

て受け継ぎ、大切に残していきたい」とこうした熱い思いが、手探りで技法復活を成し遂げる原動力の一つだったのだでしょう。

その技術と熱い思いは隆彦さん夫妻がしっかりと受け継いでいます。経木(きょうぎ)は厚紙に、ご飯で作るのり・続飯(そくい)は粉のりにと素材の変更はありませんが、その技法は江戸時代から変わりません。制作はまずスケッチをもとに下絵(もとえ)を描き、重なりを考えながらパーツごとの分解図を作ります。そして厚紙の型紙を切り、その上に綿をのせて布でくるみ接着していきます。このときに仕上りの立体感を考えて、パーツごとに綿の量を調整します。最後に隣り合う部分を貼り合わせて完成です。型紙を確定させるために試作品を作りますが、納得いくものをつくるまで2〜3年かかることもあるそうです。隆彦さんは、「作業は経験に頼りながら進めていきます。特に曲線や立体感の表現は、生地によって仕上りに差が出るので、実際に作業の中で手で触りながら調整していきます。松本押絵雛には基本となる特徴はありますが、こうでなければならぬという決まりはありません。伝統的な技術を受け継ぎながら、新しいエッセンスも取り入れていきます」といいます。

それぞれの思いを込めて 松本押絵雛を伝えたい

店頭には博物館のように、古い押絵雛から復元した押絵雛までずらりと並んでいます。松本押絵雛は裏に付いた竹串を使って飾るものですが、最近は額装や掛け軸での仕上げ希望が増えているそうです。また海外からのお客さまも増え、いまや世界へと松本押絵雛は広がっています。

ます。

同店は松本の伝統的な人形七夕人形と松本姉様人形も制作・販売しています。どの人形も「子どもに元気に育ってほしい」「元気でいてほしい」など願いを託すものです。修子さんは、「松本押絵雛を手にした人に喜んでいただけるよう、ご注文していただいた方のお顔を思い浮かべながら顔を描いています。人形は贈る人の心が形になったものとして、思いがこもりあたたかいです。店名のベラミ(フランス語で美しい友のように)、人形が皆さまの心になることを願っています」といいます。二人三脚で仲良く松本押絵雛を作り続ける隆彦さん夫妻。後世に松本押絵雛を伝えるため、より多くの人に松本押絵雛を知ってもらうため、人形教室も主催するなど努力を惜しむことはありません。



ベラミ人形店
松本市中央3-7-23
0263-33-1314

